

共生社会を生きるアフリカの言語と社会

講師：梶 茂樹先生（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）

日時 2008年3月27日（木） 15:30 ～ 17:30
会場 大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館2階会議室（参加無料）
(<http://www.osaka-u.ac.jp/annai/about/map/toyonaka.html> に地図があります)

要旨

アフリカには言語の数が多し。一説によれば世界の言語の30%がアフリカで話されている。アフリカで言語の数が多くなるのは、同じ系統で似ていても、そのことと民族的アイデンティティは別であることが多いからだ。また、国が違えば、別の名前で呼ばれるということもある。ただ、言語数は多くても、系統分類からは、語族は4つしかない。これは、北アメリカで語族が50もあることを考えれば、おもしろい対比をなす。

アフリカの言語の社会言語学的特徴は、部族語の多さと、それに関係する多言語使用である。多言語使用には、水平的多言語使用と垂直的多言語使用とがある。水平的多言語使用とは、一定の地域にいくつもの言語が並んで話されている状態、そして垂直的多言語使用とは、部族語と地域共通語、さらには公用語などが層を成して用いられる状況である。人々は状況に応じてこれらの言語を使い分ける。地域共通語は、しばしば国語と呼ばれる。

アメリカの言語学者 M.クラウスなどによって、危機言語ということがここ20年の間に盛んに言われてきた。その内容は、世界に7000ある言語のうち、下手をすると、21世紀中にその90%から95%が消滅するかもしれないという衝撃的なものである。しかし、私などはこの意見に組しない。ドイツの M.ブレンツィンガーが言うように、クラウスは英語のグローバル化と言語の国内問題とを混同している。

多くの人は、小さな言語、民族は消滅する運命にあると考えるが、アフリカでは人数の多い少ないは優劣に関与しない。これを人類学者、富川盛道は「アフリカでは部族は部族において対等である」と言う。アフリカは、自分と違うものの価値を認める社会である。富川は、アフリカにおけるこのような関係を部族本位制と呼んだ。これは、ヨーロッパの民族本位制とは異なるものだ。

講師略歴

1976年より、コンゴ、タンザニア、セネガル、ウガンダなど、主としてアフリカで言語調査に従事している。京都大学文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程単位取得退学。京都大学文学博士。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手、助教授、教授を経て、現在、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。主な著作に、『アフリカをフィールドワークする』（大修館書店、1993）、*A Ruyankore Vocabulary*（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2004）などがある。

問合せ先：
大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
TEL 06-6850-6111（内線 2189）
E-mail: sbj@let.osaka-u.ac.jp